

3 京田辺市堀切古墳群の再検討（3）

諫早直人・田口裕貴・菱田哲郎

1. はじめに

堀切古墳群は、京田辺市薪堀切谷・里ノ内に位置する古墳時代後期の円墳（横穴式石室墳）と横穴墓からなる群集墳である。甘南備山（標高 221m）の山麓から北東方向にのびる東西 2 つの丘陵上、約 0.4km 四方の範囲に、消滅したものを含め 11 基の古墳と 10 基の横穴墓がこれまでに確認されている（本書Ⅲ - 2 の図 1）。京都府立大学文学部考古学研究室では、京田辺市史編さん事業の一環で、1969 年（昭和 44）に京都府教育委員会が発掘調査した出土遺物について再検討をおこなったことを契機として（田口・岡田 2020）、堀切古墳群について再検討を進めている。本稿では堀切古墳群周辺で採集され、現在、京田辺市に保管されている土器、馬具についての調査成果を報告する。（諫早直人）

2. 堀切古墳群周辺採集土器

（1）概要

2017 年（平成 29）4 月、京田辺市立薪小学校の北東に位置する西薪公園付近の私有地である雑木林の中から須恵器広口小壺（図 1-3）が発見された。発見者によれば、土器の一部が土中から露出していた状態であったようである。その数日後、最初の発見地点の周辺において同一の発見者によりさらに 3 点の土器が発見されており、その証言による限り以下に紹介する須恵器の杯蓋 1 点、杯身 1 点、広口壺 1 点、土師器甕 1 点の計 4 点の土器は同一地点からまともに出土した可能性が高い。なお、これらの土器は発見者によってただちに京田辺市教育委員会文化振興室に届け出られ、現在、京田辺市市民部文化・スポーツ振興課で保管されている。

（2）土器

ここからは各資料の観察結果について述べる（図 1、表 1、写真 1）。

1 は杯蓋である。外面を回転ヘラケズリと回転ナデ、内面を回転ナデによってそれぞれ調整している。外面の天井部と口縁部の境界にはにぶい稜が認められる。また、口縁端部には緩やかな段がみられる。天井部外面には一文字のヘラ記号が残る。

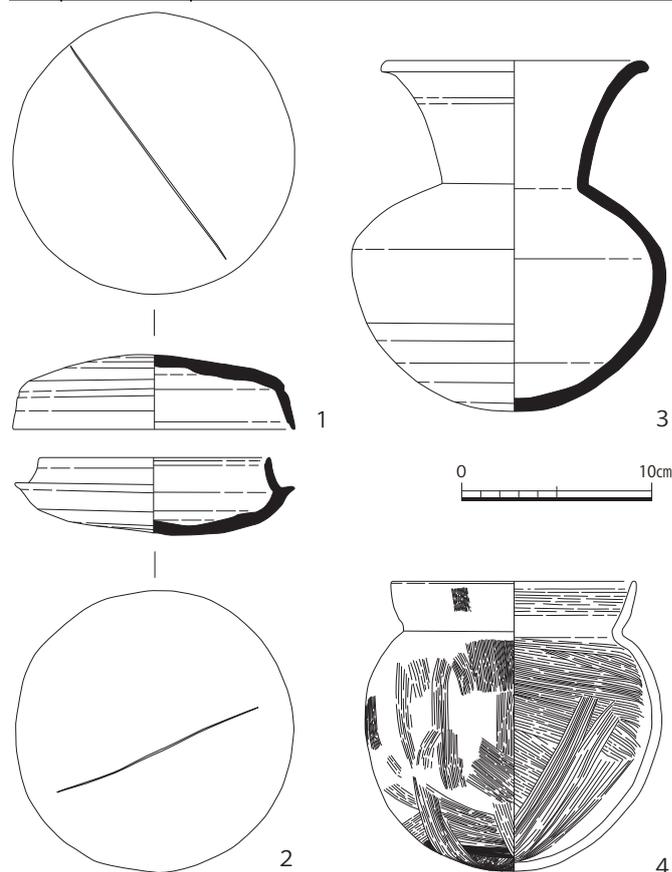
2 は杯身である。1 と同じく、調整手法はそれぞれ外面が回転ヘラケズリと回転ナデ、内面が回転ナデである。立ち上がりは長くやや内傾し、その端部には緩やかな段がみられる。底部外面には一文字のヘラ記号があることに加え、「×」字状に赤色顔料の付着が認められる。

3 は広口壺である。体部は肩部がやや張り出す形状をしており、底部を荒い回転ヘラケズリによって調整している。頸部はやや外反して立ち上がり、口縁端部は外方に向かってにぶく肥厚している。

4 は土師器甕である。丸底で球体状を呈する体部に内湾気味の口縁部が取り付く。内外面ともに全面的にハケメが施される。外面は縦方向のハケメを基本とし、底部を中心に不定方向の

表1 堀切古墳群周辺採集土器観察表

報告番号	種類	器種	法量 (cm)		残存率	色調		胎土	焼成	技法上の特徴	備考
			口径	器高		外面	内面				
1	須恵器	杯蓋	14.8	3.9	完形	灰	灰	密(直径0.1mmの白色粒を多く含むほか、少量の大型粒を含む)	堅緻	底部外面：回転ヘラケズリ（ロクロ右回転） 底部内面中央に横ナデ	ヘラ記号「一」
2	須恵器	杯身	12.1	4.1	完形	灰	灰	密(直径1mmの白色粒を多く含む)	堅緻	底部外面：回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）	ヘラ記号「一」
3	須恵器	広口壺	14.0	18.6	1/4 (口縁)	灰白	灰白	密(直径0.5mmの白色粒を多く含む)	堅緻	底部外面を粗い回転ヘラケズリする（ロクロ右回転）	
4	土師器	甕	12.8	15.4	完形	黄	黄	粗（砂粒ほぼ含まず）	良好	外面調整：縦方向ハケメ、不定方向ハケメ（底部付近） 内面調整：横方向ハケメののち、底部から縦方向ハケメ	底部外面に黒斑あり



ハケメが残る。内面は横方向の深い条痕をもつハケメを施した後、底部から上方に向かって縦方向のハケメを施している。（田口裕貴）

(3) 採集土器の位置づけ

4点の土器のうち、須恵器蓋杯のセットは年代的な位置づけが比較的容易であり、まずここから検討しておく。一見すると陶邑 MT15 型式に似た形態であるが、蓋の稜や口縁端部の段がにぶく、また厚手であることなど在地的な要素が指摘できる。むしろ、扁平化が進んでいることや身の形態からは TK10 型式に併行する特徴も見受けられる。在地の窯において地方色が発現する時期でもあり、陶邑編年をそのまま適応することが躊躇されるが、以上の特徴からは TK10 型式併行を上限と捉えてお

図1 堀切古墳群周辺採集土器 (S = 1/4)

くことが無難と考える。広口壺についても、6世紀代にみられる通有の形態であり、蓋杯と同時期と考えても矛盾はない。また、土師器甕は、須恵器と比べて地域ごとの個性が強いことが知られている。球形の胴部をもち内外面ハケメ調整という特徴は、6世紀の山城地域では通有の器形であり、八幡市の女谷横穴墓でも散見される。しっかりとした内湾する口縁部をもつ点に古い要素が看取でき、6世紀の中葉を中心とする須恵器の年代観とも矛盾しない。以上から、陶邑 TK10 型式の併行期として理解でき、6世紀第2四半期もしくは中葉という年代を与えることが可能である。（菱田哲郎）

(4) 出土遺構の検討

出土遺物の検討を通じて今回発見された土器は同一遺構に伴う可能性が一層高まったことから、2021年（令和3）1月13日に京田辺市と合同で発見地点周辺の踏査をおこなった¹⁾。発見地点が周知の埋蔵文化財包蔵地ではないこと、私有地内であることから、現時点で正確な発見地点を紹介することは控えるが、発見地点は既知の堀切古墳群側から北東方向に伸びる尾

根の崖面付近にあり、墳丘のような明確な遺構が存在した形跡は確認されなかった。発見地点に隣接しその尾根の一部を削平して1982年（昭和57）3月に造成された西薪公園には、かつて観音山古墳という須恵器器台を出土した横穴式石室墳の存在したことが知られるが、今回の発見地点は公園敷地内ではなく隣接する雑木林の中であり、ほぼ完形の土器がまとまって出土していることからみて、そのような過去に削平された古墳からの出土とは考えにくい²⁾。周辺の地形や南西に広がる堀切古墳群で横穴墓がまとまって確認されていることをふまえれば、今回発見された土器は西薪公園付近に存在した未知の横穴墓に伴う一括資料である可能性が最も高い。

ここで新たな問題が発生する。というのも土器から推測される第2四半期もしくは中葉という時期は、7号墳のような埴輪を有する横穴式石室墳が築造された堀切古墳群の造営開始期に相当し、横穴墓としてはこれまで最も古いとされてきた6号横穴墓（6世紀末～7世紀初）を大きく遡る。また、今回の発見地点が既知の堀切古墳群で最も北に位置する1・2号横穴や10号墳よりもさらに約100m北方に位置することも考慮する必要がある。明確な遺構が確認できなかったためあくまで推測の域を出ないが、今回の発見が堀切古墳群の範囲や横穴墓の出現時期に対するこれまでの理解に再考を促す重要な発見であることは確かだろう。なお、今回の発見地点である西薪公園とその南方に位置する薪神社周辺には、既知の堀切古墳群側から伸びる尾根がかろうじてではあるがまだ残存している。堀切古墳群の多くは戦後の市街地化によって消滅してしまったが、周辺には未知の横穴墓が眠っている可能性も十分あり、分布調査などを通じて早急に実態を把握し、保護の手立てを講じる必要がある。

3. 伝堀切古墳群採集馬具

(1) 概要

ここに紹介する馬具は、地元出身の考古学者で田辺町教育委員会によって1978～1979年（昭和53～54）にかけておこなわれた堀切古墳群の発掘調査においても中心的な立場にあった吉村正親氏（故人、元京都市埋蔵文化財研究所）の旧蔵品で、2019年（令和元）5月にご遺族を通じて京田辺市教育委員会文化振興室（現、京田辺市市民部文化・スポーツ振興課）が寄贈を受けたものである。馬具自体に注記はないが、同じ箱の中には堀切5号横穴墓や堀切6号横穴墓などから出土した須恵器、土師器、埴輪片、陶棺片、木炭があり、堀切古墳群周辺以外から出土したことが確かな資料は含まれていない。轡と鐙についても確証はないものの堀切古墳群周辺で採集された可能性が高いと判断し、ここに報告する次第である（図2、写真2）。なお吉村氏は生前にも堀切古墳群の北西方500mほどの所に位置し、弥生時代中期の遺跡として知られる狼谷遺跡で採集された石庖丁や土器片を京田辺市教育委員会に寄贈しており、石庖丁3点については現在、京田辺市立中央公民館展示室において常設展示されている。

(2) 轡

轡とみられる破片が3点ある。1は素環轡（環状鏡板付轡）の破片で、銜外環に環状銜留（鏡板）と引手を同時に連結する構造である。環状銜留はほとんど欠損しているが、長方形とみられる立聞部をもつ。銜は2連式で、完形の左側で長さ9.3cm、外環径3.2cm、内環径2.1cmである。厚さ1.2cm、断面方形の鉄棒を折り曲げてつくっており、外環と内環は直交する。

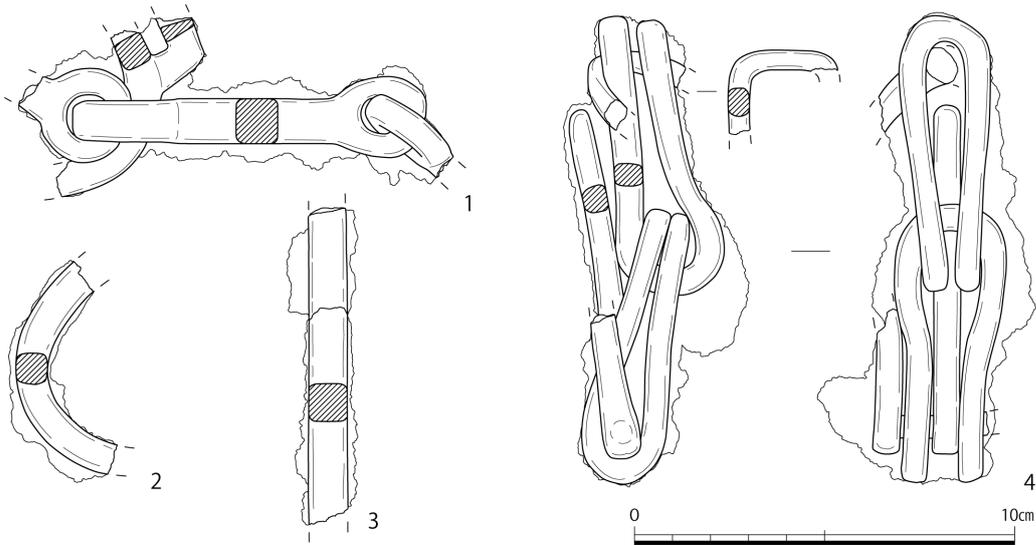


図2 伝堀切古墳群採集馬具 (S = 1/2)

引手は、内環付近以外は欠損している。内環径は2.5cmである。2は残存長5.7cmの環状鉄製品で、厚さ0.8cm、断面方形であることからみて、1の環状銜留と同一個体の轡を構成したとみても問題はない。3は残存長8.1cmの棒状鉄製品で、1の銜身よりも長いため、同じ轡の破片ならば引手の柄部だろう。以上を整理すると、1～3は1個体分の素環轡の破片とみてさしつかえないだろう。

(3) 鐙

4は三角錐形木心鉄板装壺鐙の破片である。激しく錆化しているが、透過X線画像を参考に実物を観察した結果³⁾、鉄製の鉸具と2連の鉄製兵庫鎖、鉄製吊金具の一部が連結した状態で錆着していることが判明した。鉸具は上半部を中心に大きく欠損しているが、完形の刺金部分で全長9.2cmと大型の鉸具である。2連の兵庫鎖は完形で、いずれも全長7.3cmと同形同大である。図上方の兵庫鎖の先端には幅2.9cm、残存長2.2cmのコ字状鉄製品が連結しており鐙吊金具の頂部とみられる。

(4) 小結

最後にこれらの馬具の編年的位置付けについてみておきたい。轡は引手形態が不明ではあるが、岡安光彦(1984)の大型矩形立間系(宇洞ヶ谷横穴型)、花谷浩(1986)の第2群(長方形立間素環鏡板付轡a類Ⅲ式)にあたとみられる。花谷によれば第2群にはMT85型式期からTK209型式期の須恵器が伴うとされる。次に鐙についてみる。斎藤弘(1986)によれば三角錐形木心鉄板装壺鐙の兵庫鎖(鐙鞆金具)は連数の多いものから少ないものへと変化することが明らかとなっており、氏の三E式にあたる本例については、TK209型式期からTK217型式期という製作年代が想定されている。このように轡と鐙の存続幅は一致しないものの、TK209型式期に重なりが認められ、これがセットで製作された場合の上限年代となる。TK209型式期は堀切古墳群造営の最盛期の中に含まれ(島軒2006、鈴木2010)、これらの馬具が当該期以降の堀切古墳群内の同一の古墳から出土したとみても特に矛盾はない。

堀切古墳群ではこれまでに1号墳で轡、鉢状雲珠などの馬具が出土している(京田辺市教育委員会2006)。1号墳は大正時代に石材採取に伴って盗掘を受けており、本資料についても

1号墳に帰属する可能性がないか検討をおこなったが、1号墳出土馬具と同じ遺構から出土したとする積極的な証拠は認められなかった。詳細な採集経緯・地点を知りえない憾みはあるが、堀切古墳群周辺には1号墳以外にも馬具を副葬した古墳が存在したと考えるべきであろう。

4. おわりに

ここまで堀切古墳群周辺で採集された土器と馬具について紹介をおこなった。結果として前者については7号墳のような埴輪を有する横穴式石室墳が築造された堀切古墳群造営開始期の、後者については竜山石製の組合式家形石棺を主体部とする6号横穴墓が築造されるなど、堀切古墳群造営最盛期の一括資料の可能性が高いことが明らかとなった。とりわけ前者については発見地点がほぼ特定できたこともあって、既知の堀切古墳群の範囲や横穴墓の出現時期に関する従来の理解に再考を促す、重要な資料といえる。横穴式石室墳と横穴墓が同時併存する堀切古墳群は、京田辺市域（旧綴喜郡西部）の古墳時代後期を考える上で重要な古墳群であるが、大正時代に石材採取のために破壊され、戦後の小学校建設や宅地開発によってほとんどの古墳が消滅してしまった。ここに紹介した資料が、今後、堀切古墳群を考える材料として広く活用されることを期待し、本稿を擱筆する。（諫早）

註

- 1) 踏査には菱田哲郎、諫早直人、岡田大雄（以上、京都府立大学）、綾部美輪、上野あさひ（以上、京田辺市文化・スポーツ振興課）、大屋篤史（京田辺市市史編さん室）が参加した。
- 2) 観音山古墳は1972年刊行の『京都府遺跡地図』（京都府教育委員会1972）や1982年に刊行された『田辺町遺跡分布調査概報』（田辺町教育委員会1982）およびそれ以前の文献には見当たらず、1985年刊行の『京都府遺跡地図 第5分冊〔第2版〕』（京都府教育庁指導部文化財保護課1985）で初めて確認される遺跡であるが、その時点ですでに消滅していたようである。
- 3) 透過X線画像の撮影にあたっては、奈良文化財研究所の田村朋美氏の協力を得た。

参考文献

- 岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』創刊号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 京田辺市教育委員会 2006 『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ』
- 京都府教育委員会（編）1972 『京都府遺跡地図』松香堂
- 京都府教育庁指導部文化財保護課（編）1985 『京都府遺跡地図 第5分冊〔第2版〕』京都府教育委員会
- 斎藤弘 1986 「古墳時代の壺鏡の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号 PHALANX—古墳文化研究会—
- 島軒満 2006 「9. まとめ」『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅱ』京田辺市教育委員会
- 鈴木啓史 2010 「Ⅵ まとめ」『堀切古墳群発掘調査報告書Ⅲ』京田辺市教育委員会
- 田口裕貴・岡田大雄 2020 「京田辺市堀切古墳群の再検討（1）」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第6号 京都府立大学文学部歴史学科
- 田辺町教育委員会（編）1982 『田辺町遺跡分布調査概報』
- 花谷浩 1986 「素環鏡板付轡の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会



1



2



3



4

写真1 堀切古墳群周辺採集土器 (番号は図1と対応)



1



2



3



4

写真2 伝堀切古墳群採集馬具 (番号は図2と対応)